

日本福音主義神学会西部部会春の研究会議 研究発表

コーヘレトの「へベル」とブツダの「無常」の比較

2007年4月23日(月)

金井由嗣 鎌野直人(関西聖書神学校)

はじめに(研究の経緯と意義)

この研究は、鎌野と金井の共同研究の一部である。本年6月の日本宣教学会において「コーヘレトの空と仏教の空の比較」について発表することを鎌野が求められ、その準備作業として、以前より思想的関心から仏教学関係の書籍を収集していた金井と共同でインド大乘仏教(特に中観派)における「空」を(中村元と梶山雄一を中心とする)研究書から学び、鎌野の専門であるコーヘレトの「へベル」と比較する研究会を行った。

そこで確認できた事は、以下の通り。(1) コーヘレトの「へベル」と仏教で言う「空」は根本的に異なる概念であり、「へベル」を「空」と訳したのは一種の誤訳である。(2) それにもかかわらず両者の用法にはある構造的類似があり、それぞれの思想体系の中で占める役割は共通している。(3) またそこから出てくる実践的結論はよく似ているが、背後にある世界観は全く異なるものである。(4) 「へベル」は有神論的世界観のもとで現実認識の土台となっており、「空」は無神論的世界観の中で悟りの世界から現実世界の再検討を行う働きがある。(5) 大乘仏教の「空」が持つ理論的性格と比較してコーヘレトの「へベル」は理論的性格が弱く、体験的、实际的である。

以上のことから「へベル」と「空」の比較には一定の意義があるが、比較対象としてやや無理がある感も否めない。そこで、「へベル」と良く似た体験的、实际的性格を持ち、同様に個人の思想の基盤としての意義を有するブツダの「無常」と比較することがより有益ではないか、との発想が生まれた。そのアイデアを実行に移したものが本日の研究発表である。一方の専門家である鎌野とは異なり、金井の場合はコーヘレト、仏教共に専門ではなく、特に仏教についてはもっぱら他人の研究に頼っての理解であることをお断りし、諸賢の批判と教示を仰ぐ次第である。

1. 語義の比較—「へベル」を「無常」と訳すことは可能か

はじめに、「無常」と「へベル」の語義と用法を比較し、「へベル」を「無常」と翻訳することの是非について検討する。『岩波仏教辞典』によると、「無常」の語義は以下の通りである。

無常 むじょう [s'anitya] [p'anicca]

常(つね)でないこと、永続性をもたないこと。常住(じょうじゅう)の対。苦(く)、無我とならんで、仏教の伝統的な現実認識を示す。ひとの生存をふくめ、この世でわれわれが目にするすべては移ろいゆくものであり、一瞬たりとも留まることがないということ。この無常説は後に、すべての存在するものは刹那(せつな)に滅するものであるという刹那滅論を生むことになる。

増谷文雄は「無常」がブツダの時代の思想家たちに共通して取り上げられていた主題を表す一種の術語であり、ブツダの悟りの内容と言うよりは自分の生きる世界を認識する際の前提となる概念であったことを明らかにしている¹。すなわちブツダは、「無常」に新たな意味を付け加えたりしたわけではなく、当時の人々の用法にそのまま従ったと考えるべきである。

一方、コーヘレトにおける「へベル」の語義については古来様々な解釈が試みられてきたが、具体的

¹ 増谷、梅原『知恵と慈悲』128—142頁。

な用例を踏まえた厳密な語義研究がフォックスによってなされており、これに基づくことが最も妥当であると思われる。彼によると、「ヘベル」の文字通りの意味は vapor 「蒸気、気体」であり、旧約聖書の中では比喩的な意味で ephemerality 「はかなさ」、vanity 「虚栄、無益、むなしさ」、nothingness 「無」、incomprehensibility or mystery 「把握しがたさ、謎」、deceit 「欺き、偽り」、senselessness or nonsense 「無意味さ」、と言った意味に用いられている。コーヘレトにおいては文字通りの「蒸気、気体」の意味で用いられている箇所はなく、一貫して absurd 「不条理」の意で用いられている。またコーヘレトには「無」や「無益」のように存在や価値に対する判断を含む用法はなく、物事の結果が常に予測不可能であるという点で物事の原因と結果を結びつける人間の期待が満たされず、「道理」を想定できないという知性の限界を表現する術語として用いられている²。

このようにブッダの用いた「無常」とコーヘレトの用いた「ヘベル」を比較するならば、両者は根本的に異なる範疇に属する用語であることがわかる。「無常」が事物の存在に関わる概念であるのに対し、「ヘベル」はもっぱら人間の認識に関わる概念なのである。それゆえ、「ヘベル」は「無常」とは意味論的に異なる単語であり、「ヘベル」を「無常」と訳すことは明らかな誤訳であると結論することが出来る。なお、「ヘベル」を「空」と訳すことについても事情は同じである。

2. 思想構造における役割の比較—「ヘベル」と「無常」は構造的に同じ機能を有すると言えるか

上述のようにコーヘレトの「ヘベル」は仏教で言う「無常」や「空」とは根本的に異なる概念であるにもかかわらず、多くの人々が（漢訳聖書や日本語訳聖書に典型的に見られるように）両者の間に共通性を感じ取ってきた事実³を、われわれは無視することが出来ない。そこで、単語の語学的な「意味」ではなく、思想の構造における「機能」に注目して両者を比較してみることにしたい。

増谷によれば、「無常」という術語は（しばしばセットになる「無我」と共に）ブッダの最初期（成道直後）の黙想や説法には用いられておらず、弟子たちのために教説を整理して説く中で初めて用いられるようになったという⁴。すなわち、この語はブッダの思想（悟り）の内容と言うよりはむしろ悟りを求める前提となる世界認識を表す用語である。

またブッダは「世界は常住か無常か」と言う問いに対しては答えることを拒否しており（相応部經典 35.1 「無常（一）」、中部經典 63 「毒矢のたとえ」⁵など）、「無常」それ自体がブッダの思想的関心の中心ではなかったことは明白である。彼が「無常」を取り上げるのはもっぱら人間存在に関する言及の中であり、無常・無我である人間が世界に執着することを戒める説法の中である。従ってブッダにおいて、「無常」の語はもっぱら人間とこの世界とのかかわりに関して、現実世界に対する執着を戒めるために用いられている。それゆえ、このことばは人間の営みにもっぱら適用される（「諸法無常」ではなく「諸行無常」）。「無常」を知ること自体が悟りなのではないが、「無常」は自己の無力さを知って悟りを求めるための前提なのである。

なお、人間存在一般の世界一般に対する関係の叙述である以上、「無常」は個別の事例における体験を超えて「すべて」に当てはまる真理である必要がある。「一切は無常である」「一切は無我である」（諸

² Fox, *A Time to Tear Down and A Time to Build Up*. pp.27-33.

³ 中沢洽樹『空の空—知の敗北』は一例。

⁴ 増谷『知恵と慈悲』128—131頁。

⁵ 長尾雅人編『バラモン教典 原始仏典』473—478頁

行無常、諸法無我)との言述は、ブッダの思想体系を形作る前提として機能し、そこから実践の体系が導き出されていくことになる⁶。

一方、コーヘレトの思想において「ヘベル」が占める位置に注目してみる。まず「ヘベル」は、コーヘレトが人間と世界との関係を論ずるときの基本的前提である。彼が人間としての様々な経験を徹底して追及し、その結果を顧みる中で繰り返し「一切はヘベルである」との総括がなされる。また「ヘベル」は個々の体験の反省であるのみならず、すべての経験を通じて知られる真理であり、人間存在と世界とのかわりにおいて常に経験される宇宙論的真実である。(それゆえにコーヘレトは「一切はヘベルである」と告げるのである)。また「ヘベルである」との真理の発見はコーヘレトの思想の終着点ではなく、その発見がそのまま問題解決や悟りであるわけではない。コーヘレトにおいては「ヘベル」である人間と世界の現実決して解消されないが、その現実を通して「造り主」である神を認め、神の存在を計算に入れた上で世界が与える喜びを十分に味わうことが現実的な解決である。コーヘレトはしばしば(ブッダと違って)現実世界での生活に楽しみを見出すよう勧めるが、その楽しみは人間の生活が神の手の中にある(従って自分で結果を左右できない)現実を認めることから出てくる実際の処方箋である。人間と世界とのかわりは常に「ヘベル」であり、その認識に立って現実世界への過度の執着を戒める構図はブッダにおける「無常」の使い方と共通しているが、コーヘレトの方が現実の世界に対してより肯定的である。

以上に見られるように、仏陀の「無常」とコーヘレトの「ヘベル」がそれぞれの思想の体系、および思想から実践に至る適用の過程に占める位置は極めて良く似ており、我々が両者の間に感じ取る類似性は、それぞれの思想の体系における機能の一致に由来する構造的類似性であるということが出来る。

3. 思想の比較—「ヘベル」と「無常」の比較を通して見た、有神論的思惟と無神論的思惟における「限界思考」の違い

コーヘレトの「ヘベル」とブッダの「無常」の構造的類似性と意味論的相違を通じて、それぞれが有する世界観の比較が可能となる。人間一般が置かれている限界性の認識において、またその現実に対処する実際的態度において、両者はきわめて類似しているが、その認識の基盤は全く異なっている。

コーヘレトは人間の知性の限界を認め、現実への過度の期待を戒めるが、その根拠となる「ヘベル」と言う現実認識はあくまでも認識論の次元に限定されており、世界の存在そのもの、また世界がもたらす価値のすべてを否定するものではない。このことは、彼が創造者である神を前提とする思惟構造を持って生きていることに由来する。世界の存在は創造者である神に属する事柄であり、知性による批判の対象ではない。人間の知性の限界ゆえに世界は予測不可能であるが、その限界は人間が人間であって神ではないという、創造者との間の存在論的差異に由来する。

一方、ブッダにおいては世界を創造した神(あるいは超越者)の存在自体が当然の前提ではなく、認識(神秘的直感も含めた認識ではあるが)による批判の対象である。従って知性が捉えた世界の全体像が変転し予測不可能である以上、世界の存在もまた変転し予測不可能なもの(無常)として理解されざるを得ない。彼の世界認識の術語である「無常」は存在論的な広がりを持たざるを得ないのである。

我々人間が生きる世界の現実において、世界は常に変転し予測不可能である。コーヘレトとブッダは共に能力の限りを尽くして人間と世界についての認識を深め、経験を反省熟考し、その上で知性の限界を認めて世界への過剰な期待と欲求を戒める。その透徹した知性と健全で実行可能な実践の勧めにおい

⁶ 以上の論議は、増谷『知恵と慈悲』132—149頁の要約である。

て両者は極めて類似しているが、その拠って立つ世界観は根本的に異なるものである。有神論的世界観においては人間の限界を認めつつもなお神が創造した世界の存在そのものは疑う必要がなく、世界が根元的には「良きもの」であるとの信頼を持って生きることが可能であるが、無神論的世界観のもとでは思索が深ければ深きだけ世界の存在そのものに対する信頼が揺るがされることになる。その深さに耐え抜くブツダの思索の偉大さに敬意を表しつつ、キリスト者である発表者は、創造者を知ることが弱き人間にとっての大きな恩恵であることを確認するものである。もちろん、コーヘレトが示唆する有神論的世界観にいかにして到達するか（言い換えればいかにして神を知るか）は、また別の課題として残されている。キリスト教思想においては、イエス・キリストの救いがその答えとなる。

<参考文献>

(1) コーヘレト関係

N. Kamano, *Cosmology and Character. –Qoheleth's Pedagogy from a Rhetorical-Critical Perspective.* BZAW312, Walter de Gruyter, 2002.

M. V. Fox, *A Time to Tear Down and A Time to Build Up. –A Rereading of Ecclesiastes.* Eerdmans, 1999.

D. Lys, 'L'Être et le Temp. –Communication de Qohèlèth.' in M. Gilbert, ed., *La Sagesse de L'Ancien Testament.* Leuven U.P., 1990.

中沢洽樹『空の空—知の敗北』（山本書店）、1985。

(2) ブツダ・原始仏教関係

『岩波仏教辞典第二版 CD-ROM 版』（岩波書店）、2004 年。

中村元訳『ブツダのことば—スツタ・ニパータ』（岩波文庫）、1984 年。

同 『ブツダの真理のことば 感興のことば』（岩波文庫）、1978 年。

同 『ブツダ最後の旅—大パリニッバーナ経』（岩波文庫）、1980 年。

長尾雅人編『世界の名著 1 バラモン教典 原始仏典』（中央公論社）、1969 年。

中村元『仏典を読む 1—ブツダの生涯』（岩波書店）、2001 年。

増谷文雄、梅原猛『仏教の思想 1 知恵と慈悲<ブツダ>』（角川文庫ソフィア）、1997 年。

梶山雄一『空の思想—仏教におけることばと沈黙』（人文書院）、1983 年。

同 『空入門』（春秋社）、1992 年。